

## クリーンエネルギーとしての原子力：国際的議論の動向

原子力グループ 研究員 木村 謙仁

原子力が「クリーンエネルギー」であるか否かは人によって見解が異なるところだが、国際的議論の場ではクリーンエネルギーとして扱われることが増えてきたように思える。2019 年 5 月下旬、国際エネルギー機関 (IEA) は *Nuclear Power in a Clean Energy System* と題したレポートを公開した。IEA が原子力のレポートを出すのは約 20 年振りとなる<sup>1</sup>。この直後には、カナダで開催されたクリーンエネルギー大臣会合 (CEM) でも、*Breakthroughs: Nuclear Innovation in a Clean Energy System* と題した出版物が発表されている<sup>2</sup>。

前者の IEA レポートは、世界のエネルギー需給構造がクリーンエネルギーシステムへと転換していく際の原子力の重要性を指摘したもので、原子力発電所の運転延長や新設が十分に進まなかった場合、CO<sub>2</sub> 排出量は約 39 億トン増加し、この排出量を抑えるためには、1.6 兆米ドルもの追加投資が必要となる (いずれも 2040 年までの累計) といった見通しを示している。そういった見通しを踏まえて本レポートは、現実的な形でエネルギー部門の低炭素化を実現するには、原子力に十分な投資が行われるよう、強力な政策的支援を実施する必要があるとしている。

後者の出版物は CEM 傘下の取組みの一つである「原子力イノベーション：クリーンエネルギー・フューチャー (NICE Future)」と呼ばれるイニシアティブから発行されたもので、こちらは前述の IEA レポートのような政策提言はなく、原子力の果たし得る役割に関する短い記事を多数取りまとめた形式となっている。集められた記事は技術開発の取組みや再生可能エネルギーとの併用による大幅な低炭素化を扱ったものから、教育や女性の活躍を説いたものまで、多岐にわたる話題を提供している。

形式こそ異なるものの、両者に共通するのは、原子力をクリーンエネルギーの一つと明確に位置付けていることである。原子力のみならず、エネルギー分野全体に大きな影響力を持つ IEA および CEM から立て続けに示されたこうした見解は、原子力の意義や位置付けをめぐる国際的議論の重要な潮流に影響を及ぼし得るものといえよう。他方で、前述の IEA レポートも「原子力を利用しないことを決めた国については、その選択を尊重する」と冒頭に明記しているように、どのような手段で持続可能な将来を築くかは、あくまでも各国内での議論に委ねられることになるのはいうまでもない。国際的な枠組みから提供された情報は、そうした国内議論に対して原子力というオプションの意味を改めて提示し、議論を活性化させるためのものと位置付けられる。今回発表された報告書が、各国でのエネルギー政策をめぐる今後の議論にどのような影響を与えていくのか、改めて注視していきたい。

お問い合わせ : report@tky. ieej. or. jp

<sup>1</sup> <https://www.iea.org/publications/nuclear/>

<sup>2</sup> <https://www.energy.gov/ne/articles/breakthroughs-untold-story-nuclear-clean-energy-enabler>